

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和八年二月作品集

黄金山に暮らして 雲雀

五十年近く前に、黄金山に越してきました。来た当時は、春には鶯が鳴き、近くの池では蛙が鳴き、町内放送で地域の伝達があつたりしました。その後、次第に圃地が広がって、様子は変わり、今では、当時のことがとても懐かしく思えます。退職して時間ができてからは、健康のためと、一時間ほど散歩することが多くなり、また、細い山道では、季節の花や草木に目を惹かれ、家々の手入れされた庭木の美しさに足が止まることもしばしばです。この度の特別作品は、四季の移ろいの中の日々を思い起こす良い機会になりました。

漫ろ歩くこの坂道に犬ふぐり

でこぼこのこの道の先つくしんぼ

鶯の声のまにまに物を干し

桜纏ふ黄金山を見上げけり

花祭生まれし吾子はもう五十路

門前に人が足止めクレマチス

朝涼に歩いて今日も会ふ人よ

夏祭片付け終へてただ静か

朝夕に凌霄の花掃いてをり

立ち話玄関口の蚊遣かな

《作品鑑賞》

ふじ女

黄金山の、日常の中にある自然と時の移り変わりを感じさせていただき、和やかな気持ちになりました。身近に大きな愛すべき山という存在があるのは、定点観測できていいですね。住んでいるとなれば、変わるようでも変わらぬ物差しを持って暮らしている豊かさにも思えます。黄金山は、毎年桜を見にいらしていた時期もあり、混雑するので葉桜のドライブが多かったこと、チューリップ咲くどこかの家の花壇が綺麗だったことを思い出しました。

でこぼこのこの道の先つくしんぼ

このこの、という言葉の並びが可愛らしいです。つくしを山のように採る人は減ったと思いますが、黄金山ではどうでしょうか。

門前に人が足止めクレマチス

この家に住む人も嬉しいでしょうね。花談議が普通にできそうな気が感じられます。

朝涼に歩いて今日も会ふ人よ

新聞では恐ろしい事件がいろいろありますが、日常ではそうでもないことも多いことに気付かされます。毎日、同じことを楽しんでいる人がいるというのは、その誰かの存在だけで、ありがたく思えます。俳句も同じですね。

帰路いつも冬夕焼に向かひけり

水鳥の鳴いて潜つて足守川

きらきらと竹の間を冬の川

川の音聞く人もなく古墳凍つ

冬の月雑木林に沈みけり

雪ひとつふたつと安芸に降り始む

足早に前照灯の雪よぎる

光頭が灌木弾き雪の山

風邪籠スマホと体温計を置き

凍星を見詰めてるたる部屋の窓

もう来ると川辺にゆけば鶴かな

冬の鵝色なき原にみじろがず

枯鶯の窓打つ芸備線てゆく

背を伸ばしまた歩き出す冬の道

冬苗橋を渡れば広がりぬ

初風に吹かれいつもの川辺かな

臘梅の香りを吸うてまた吸うて

けふは吾ひとりに香り冬の梅

冬萌や傍に雀も跳ねるなり

暮れかけて灯点すころや春を待つ

日溜りにぼんやりと立つ小春かな

山茶花や自分史の稿立ち上ぐる

語んずる般若心経寒き朝

息白くまたねと友と別れけり

手を濯ぐ礼拝前の寒の水

水仙の香れる部屋の一句かな

姉妹で行く旅先きまる春隣

泉境の川に魚飛ぶ雨水かな

風光る体操部屋の大鏡

川上の流れゆたかや猫柳

佐保光俊

高尾ひとみ

あざみ

合唱のふるさとを聴く小六月

冬日差しりハビリ室の出入りかな

ひとりゆく長く真直な冬木道

閑きさり山茶花へ日の差してをり

校庭に見童いつばい冬青空

誕生日赤き冬薔薇胸に受け

雪降ると籠のインコに話しかけ

癒えし友の背や丸く冬苺

寒の内ひとり見てるる時代劇

寒鯉の動くをしばし見下ろせり

臘梅のほのと光りて薄明来

全句集ゆるり読み継ぐ冬の夜

行列に疲れし肚へ蕎麦湯かな

蕎麦湯割り夫婦揃って酔ひにけり

百里来て雪しんしんと淡海かな

海鼠噛む産地の酒を呑みつ

けふもまた程よく焼けぬ菊白子

大寒の星の明るき家路かな

働けば来るしあはせよ根深汁

お守りの揺るるリユックや春を待つ

軒近く過ぐる電車へ木の景散る

鞍馬へと分かるる駅や柿落葉

鳳凰の声が聞きたし冬の寺

端座して茶花を見たる冬座敷

熱燗を酌んで久なる黒造り

壺湯より月仰ぎたる寒の入

雪晴に何の水輪か船溜

繫舟の艦に一羽の冬かもめ

係船をどつと見る子の冬帽子

寒夕焼客船去りし波止場かな

亞矢

綾乃

井藤希

枇杷の花ほのかに香る庭の光

勤め終へ見上ぐる空の冬の月

友よりの大根煮てるる匂かな

おでん煮て夫と二人の夕餉とす

臘梅の香に誘はれて庭に居り

玻璃越しに庭に降り積む雪を見る

静けさや足跡のなき雪の朝

気合入れ玄関開くる雪の朝

雪止んで裏山に日の差してをり

牡丹雪見るまに景色変はりけり

大畑恵

峡はけふ日もすがらなる冬日和

眠る山映して峡の川流る

雪はげし電車灯して過ぎにけり

早梅の旅立ち近き子へひらき

立春の蒼天をゆく機影かな

鴉鳴く春立つ樅の天辺に

余寒なほときには鶯の低く飛び

人氣なき園あちこちに名草の芽

木の芽雨やむ山畑に入動く

春潮を渡りて神の島に來し

暁子

山莊の雪の様子を見に夫は

雪しまく予定なき身の氣樂さよ

なぢみの田なぢみの畑も雪の原

吾子と酌み雪の遊びの話など

飽きもせず雪の降る街見てをりぬ

閑かなる今朝も風花舞ひたるか

夜のとばり下りて一層寒さ増す

臘梅を病む義弟に届けたり

日脚伸び下校子たちと声交し

牡丹雪影持ちゆるり落ちて消ゆ

すみれ

冬晴や映画の主題歌口ずさみ

パソコンにステッカー貼り冬日和

手作りのクッキー包み窓の雪

細雪スカイランタン持ち帰る

ふるさとの静けさ寂し雪はげし

公園の恐竜模型山眠る

職場からのんびり帰る春の雪

早春や観覧車にてプロポーズ

休日のポテトチップス春の夜

春めいて巨石墳に立つてをり

臘梅をややためらひてさはりたり

水鳥の近寄りて来る土手に立つ

鳥を狩る鳥の羽ばたき春浅し

薄氷の溶けて松葉の沈みゆく

手の平につかみ損ねて春の雪

梅林を曲がりて同じ梅に会ふ

どこからか良き香りして春野かな

ものの芽の鉢あちこちに動かせり

子雀の驚かぬやう近寄りぬ

足はどくと声かけられて花菜風

山茶花の散り敷く坂を降りけり

着ぶくれの園児手つなぎ散歩かな

白寿の母チエックのマフラー似合ひけり

丸まつて母の寝てるる蒲団かな

幼子と炬燵に入りミニカーす

枕元を子ども行き文ふ風邪籠り

縁側から餅搗の様見てをりぬ

餅搗終へ道具一式片付くる

黙々とかまくら作る父と母

仏壇の寒菊今も綺麗なり

竹田千絃

知佳子

ちどり

雨だれのゆつくり落ちて草紅葉

時々是小鳥の声の枯野かな

丘の上の光りしものや冬夕焼

鴨たちの水脈曲線と直線と

この岸と決めて眠るか番鴨

臘梅の行きも帰りも香りけり

諏訪湖から富士を望みて三日かな

寒林や朝日に透けて八ヶ岳

大寒の玻璃戸に昇る朝日かな

水仙の崖となりたる小川かな

帰り道見上ぐる小さき冬の月

冬の星息子と二人見上げたる

日向ばこ猫も擦り寄るひと時よ

室咲を卓に飾つて友迎ふ

海鼠腸をすつと啜りし母徳ぶ

御粧して出掛くる吾子よ冬椿

冬董しやがめば微かに揺れてをり

門前の水仙によく日の差して

米寿なる夫と過ごしつ春を待つ

梅便り聞いてより明日行くと決め

春浅き空港振る手を下げる人

景脈を裂いて二人の桜餅

雪しろの山脈眺む空の鷹

雪汁の運転たくましく薄着

雪解風山中遠く鹿の鳴く

除雪車を見上げるばかり来訪者

氷瀑のロープどら焼きの屋台

連山の地吹雪まとめ展望所

凍て返る嫌がる道を好む人

黎明に羽伸ばしきるつがい鶴

辻純江

雲雀

ふじ女

冬ざれの中州に鷺の一羽来る

街路樹のところどころに実南天

鶉の来て実南天の枝しならする

バス降りし人影の散る寒暮かな

寒椿残し駅舎を改築す

凍空や家に灯りの点きはじめ

底冷の路地のどこかに猫の声

海ひかる一月の日を跳ね返し

枝垂梅母亡き後も咲きつづけ

昼過ぎて雪解の青き空となり

庭の葱餛飩にのせる香の嬉し

マスクとり吸ひこむ風の香りたる

利手のみ失せし手袋スマホゆえ

トロンボーンで「春よ来い」吹き母泣ひ

陸橋の上で見てゐる春の月

雲間より赤銅色の春満月

晴れた今朝梅を探りに出かけやう

白梅に日の差し始む朝かな

紅梅に雨降り始む夕べかな

したためたる筆置かれあり春障子

枯蘆や中州の風に揺れ止まず

洗顔の朝の肘這ふ冬の水

朝まだきくぐる鳥居に小雪かな

道ひとつ変ふる散歩に野水仙

手つかずの上梓句集や二月尽

雪解や魚拓の部屋に磨く筆

歩きつづ句帳に一句梅まつり

ママ友の呼び出し掛かる春の昼

通院を終へて我が家の春灯

歳たびも塀に声して猫の恋

松田裕子

村上正人

森口良樹

キルト縫ふ針の音する冬館

綿虫を追うてみればなほ高みへと

刺し綱の岸から岸へ冬の川

冬の氷に浸せば違ふ石となり

名を書いて石を並ぶる寒夜かな

オリオンの点を結べる窓辺かな

シリウスの白き光や街の上

軒の雪積もれるままに里の家

氷柱より雫の落つる縁の光

秋楡

笛の音や比婆の名の付く里神樂

枯れ楡の向うの雲の白さかな

寒禽の声のしてゐる藪深し

コンサート待つ行列に寒雀

細氷を潜りてゆきぬ伯耆富士

縦走の最後の小屋や木の根明く

出迎への高く上ぐる手春近し

路地裏の梅みなふふみ昼下り

早春の木洩れ日に置くマイカッブ

今井淳子

曇天に枝際立ちて冬木かな

雪の囀鳴き飛ぶ鳥をひとり見る

初春の社の屋根に鳥一羽

冬晴や長き回廊めぐりつつ

焚火して語らふ人の手にせんざい

子は友とバイクで式に雪舞ふ日

寺町の門の向うに冬桜

袂から母のハンカチ冬羽織

水仙を今年も生けて誓ひまつ

金つ

泥濘を踏んで水の香春近し

若草を翻したり土手の風

春光に拍手カープキヤンプ終ふ

春光の滑走路奏つ機影かな

春光の裸婦像の肌指でふれ

高階のバイキングなり海のどか

二日酔の朝に啜れる蜆汁

立て続けの会議の終り花ミモザ

飼主に脇目もふらぬ恋の猫

山野ウタ

帰省子にいつ帰るかど聞いてをり

冬の朝ハローワークへひた歩く

短日や秒針の音響きをり

大晦日昭和歌謡を口ずさみ

夜半まで積る話や大晦日

冬晴や走者の背中目で進うて

駅伝の最後の走者冬の風

春近し世間話の美容室

土肥律子

夫の忌を冬の日差しに済ませたる

湯たんぽに恐る恐るに足を乗せ

三人の子よりベッドの初荷かな

謡初は秋田さのさに声合はせ

自転車は自転車が抜き春近し

受験子の何度も予報確かめて

高梨英子

水鳥を数へつ行く屋形船

潜るたび尻尾の浮かぶ池の鳩

立春の朝の空気を胸に入れ

末黒野の土手に佇む鶯一羽

独り居の雛に点す灯りかな

かまつかの芽の赤々と雨に濡れ

前田苑子

昨夜の雪庭一面に光さし

春の雪枝しならせて落ちにけり

隨身が守る雛段我がために

涅槃西風眠れぬ夜のラジオかな

愛犬のリード伸びきり草朧

大原良子

会社へと一歩踏み出す春の雪

法面の黄水仙へと手を伸ばす

雨上り春告鳥の声聞こゆ

本川の水面は静か春の暮

現れし干潟に鳥の足の跡

上島康子

冬帽子かむれば母と同じ顔

みどり子に雪を見せんと帽に入れ

天守閣見上げて過ぐる梅見かな

一つづつ木の名確かめ梅の園

行燈のぼんやりとして雛の家

桑門わかこ

春立ちて瀬戸の島々ぼんやりと

久々に姉妹揃うて春の里

梅の香の祠奥から漂ひぬ

如月の空を野鳥の群れ飛びぬ

水仙の同じ方向き咲き揃ふ

美耶

口結び冷たき遊具よぢ登る

よぢ登り遊具のてっぺん冬日和

足に落ち少しべそかき晚白袖

皮剥きは夫に頼んで晚白袖

白梅へ孫抱き上げて散步道

山崎桂子

宮島の紅葉並木を散歩する

芸術線窓から見ゆる冬景色

元旦におみくじ引けば吉と出て

成人式色とりどりの晴着かな

河原静子

冬草を踏みしめ歩く靴の下

冬の日キラリと光る木のしづく

残雪の躑躅の上の模様かな

雪解の露立ち込む田んぼかな

紀英子

手毬唄待合室に流れをり

長短の氷柱をあつめ子ら遊ぶ

父と子の四温日和のコンサート

参道に猿の曲芸梅の花

高嶋頌代

早春や親戚来ると便りあり

野点席春告鳥の声のして

土手下の植込みのなか春の鳥

車園見胸に大きな花を付け

民

春泥を犬に引かれて渡りたる

それぞれに好きな枝言ひ梅見かな

振り返り見る白梅の白さかな

鶯餅そつと手に取り眺めたる

梅子

餅を焼き何も煮かつた日のおやつ

雪の朝バスのチエーンの音のして

立春の日差のなかの散歩かな

上條忠

東風吹くや高層ビルのまた増えて

クツシヨンの窪みたるまま二月尽

増築の続く学び舎花辛夷

熊谷ゆり子

かつば酒熱焔にして振る舞ひぬ

たまに来る猫の長居や日脚伸び

日脚伸び下校の子らのはしやく声

志路隼

路地ぬけて畦に列なす犬ふぐり

息急いで石段のぼる梅日和

海眺め梅の香のなか風のなか

やす保

銀杏の弾くる音の楽しくて

バリバリと足に伝はる霜の音

讚美歌の聞こえてきたる冬の朝

孫生

山鳩の香ついでむ冬の庭

粕汁に酔うて会話の弾みけり

臘梅のほのかに香る匂会かな

和田史子

寒風に街ゆく人の足早に

ピツピツと鳴り返る夜の警報機

桜湯

再会を友と喜ぶ冬日和

大寒の予報の当たる道歩く

古川廣子

窓向ういつもの木々の揺れ寒し

エプロンにみかんを抱いてお裾分け

みさ子

里宮の前に雪山仰ぎけり

松本卓士

令和八年一月度作品集より

あざみ 私の選んだ十句

竹林の音立ててゐる馬日かな	佐保光俊
鶯枯れて林にモダンアートのかな	高尾ひとみ
常の木に常の雀や寒の入り	曉子
風邪の夫声出ず我を手まねきす	すみれ
いくたびも写真見返す年賀状	知佳子
餅搗の合ひの手夫がしてをりぬ	ちどり
門松と犬も一緒に家族写真	雲雀
雪拭ふ車椅子母乗せたまま	村上正人
風花やステージ川の余命問ひ	森口良樹
成人式子の背をボンと送り出す	高梨英子

竹田千絃 私の選んだ十句

朝日差す幹太太と冬木立	高尾ひとみ
灯台の回りを歩く冬青空	並矢
雪降つて富士の裾野の広きかな	大畑恵
在宅の長き一人や冬の梅	森口良樹
冬日和タイヤ交換眺めをり	秋楡
年の暮娘の仕事見届けに	なつ
ピリピリと表紙を破り初暦	撫子
冬の朝鉄瓶に沸く湯の甘し	松本卓士
末つ子のセーター繕ふ日向かな	和田史子
隔てなく隣の屋根も雪積もる	民